

金山診療所の現在

町立金山診療所
主任看護師 佐藤 朗子

町立金山診療所が無床診療所となり2年が経過しようとしています。無床診療所としては駆け出しですが、昭和22年に金山町に診療所が開設してから75年が経過しています。

町外出身の私は診療所の歴史の長さや、開設当時の病院の場所に驚きました。歴史のある分、過去をフィードバックしながら未来の構築への足掛かりを築いていきます。

診療所では外来診療(内科、外科、疼痛外来、小児科、精神科)や訪問診療、リハビリテーションのほか、各種事業を行っています。

【各種検査】

▼全身CT検査
X線を利用して身体の内部(断面)を画像化する検査です。

▼大腸CT検査
大腸を炭酸ガスの注入によって拡張させCT装置を用いて三次元画像を撮影します。内視鏡検査と比較して苦痛がなく、スムーズに大腸を検査することが可能です。

▼胃内視鏡検査

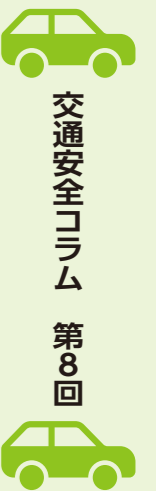
口や鼻から内視鏡の細い管を通して、胃の内部をカメラで映すことによって病変や異常がないかどうかを確認する検査です。現在は胃がん検査の中でもっとも精度の高い検査の一つとして、健康診断や人間ドックの際のがん検診にも多く取り入れられています。

【健診事業】

▼診療所ドック

町立金山診療所ドックは75歳以上の男性が対象となります。75歳以上の女性で婦人科検診を受けない方も対象です。ドックは病気の早期発見・早期治療です。定期的に身体の総合的な精密検査を行うことで、「自覚症状のない病気」や「将来的に引き起こす恐れがある疾患や臓器の異常」などを早期に発見し、医師の診断に基づいた早期治療・予防を行います。

町立金山診療所は、町の診療所として町民の皆様のため気軽に相談できる診療所を目指しています。何か困ったこと、不安なことがあればご相談下さい。



まだまだ続く雪道の運転
安全運転で過ごしましょう

12月の記録的な大雪から始まった冬のシーズンは、最も寒さが厳しくなる大寒(1月20日)を越えましたが、本格的な雪解けまではしばらくかかりそうです。これからの時期に気をつけた冬道の走り方と、春に向けた準備について確認しましょう。

○冬道の運転について

▼日中は気温が上がり夜は冷えるため、ブラックアイスバーンに注意
交差点や橋の上などは特にアイスバーンが発生しやすい状態です。早めのブレーキと車間距離は十分に保ちましょう。

▼車に積もった雪は走行前に落としましょう
車に積もった雪を載せたまま走行し、ブレーキを踏んだ際にフロントガラスに滑り落ち視界が遮られた、またはワイパーが故障したなどの事例が発生しています。

▼除雪後の雪の塊に注意しましょう
除雪後の道路にはまれに大きな雪の塊が残っていることがあります。接触

すると車両の破損などにつながるほか運転手などのケガにつながる可能性があります。

○春に向けての準備について

▼春・秋用のワイパー、サマータイヤなどの物品を確認しましょう
秋に取り外した際に確認した方も、保存状況によっては冬期間で劣化が進んでいる場合があります。

▼洗車用品などを事前に購入しておきましょう
冬道を走行した車は鉄粉や泥などが固着した状態です。そのままの状態していると塗装が痛んだり、足回りなどの錆につながったりする場合があります。また、用具を一式揃えようとする結構な費用になることも。自分で洗車する方は、必要なものを計画的に購入しておきましょう。

▼免許証の住所変更や車検証の所有者変更などの手続きを忘れずに
進学や転勤などによって、住所変更などがある3月から4月は、何かと忙しい時期であるため、免許証の住所変更や車両の所有者変更などが後回しにされがちです。免許更新のはがきなどの重要書類が届かなくなる場合もありますので、忘れずに行うようにしましょう。

ーわたしと金山ー No.14

林 寛治

金山町住宅建築コンクールの未来と金山住宅について

1976年竣工のめばえ幼稚園(現・めごたま・めばえの森)と1977年の金山町保育園増改築(現・金山ハウスー支援施設)完成の時期は、日本全体の景気が再度上向いてきており、金山町内では積雪寒冷期の山形・仙台・東京方面への出稼ぎ収入増加により、住宅新築機運が高まっていた。

金山町商工会主催と金山町が後援して始まった金山町住宅建築コンクールは、金山大工が金山杉を使用して造る金山住宅により、地産地消と景観形成を重ねて推奨するという画期的な目標をもって、1978年に始動しました。1963年に先行して始まった岸英一町長による金山町美化運動の発展型として、町と町民一体の主導による質実伴った新築住宅を供給・確保し、景観形成を図るまちづくりが胎動したのです。

金山住宅の骨子は、当時少なくなりつつあった伝統住宅と調和する外観を、町民建築主の意見を取り入れて、金山大工・棟梁、および建築士が協力してまとめるという、緩やかで自由な正に金山町を象徴するものです。

コンクール開始時は町内でも新築ラッシュが続きました。金山住宅の優劣を競うコンクール審査は、1次で地元大工・棟梁・建築関係者が10軒ほど選び、2次審査の段階で婦人会を含む地元団体代表と建築士を含む専門職を合わせ12、3人が現地審査を行うという念の入れ方でした。1980年から84年までの5年間の2次審査物件が86軒と記録されていますから、1次がその倍と多めに略算しても、平均年30軒ほどの金山住宅が建てられていました。

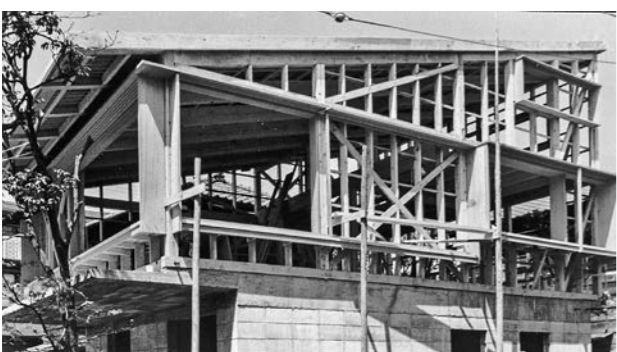
金山住宅とコンクールの運動は特徴と個性のある都市を形成するものとして国交省(旧建設省)にも注目されました。しかしながら、1990年初頭のバブル崩壊とその後の急激な少子高齢化の進行で、新築軒数は大幅に減じています。

住宅建築コンクールも金山町景



▲1970年私の家建設中の和田啓棟梁、大工・斎藤吉見君、樋渡二郎君

観条例も今なお存在・存続していますが、対象新築物件が少なくなってきた一方で、住宅が足りなるとの話しも伝わってきます。いま、画一的な公営住宅を増やすよりも、古屋を改修して再生することが、地産地消と景観形成に寄与することになると考えます。改修工事は費用が掛かると言われますが、新築よりも安くできる方法を先ず初めに研究開発するのが金山町の在り方ではないでしょうか。都会の戦後住宅と異なり、小規模農家建築であっても金山の木構造は骨太であり、建築士・大工棟梁皆さんの腕の見せ場にも



▲1970年私の家木造部、屋根工事終了時の姿

なる筈です。古い空き家再生を金山の新しい課題にするのもまた街並みづくりにつながる一考であり、成果になるでしょう。
No.9に連載の、「私の家」が築52年目を迎え、建築知識ビルダーズ誌110号に14頁に亘り掲載、また昨年12月3日JIA日本建築家協会アーバントリップで2時間のオンライン紹介内1時間30分の下手なお喋りをしました。近くYouTubeで発表されます。故和田啓棟梁の仕事ぶりが詳しく見られます。